＜記念講演＞

川柳の語用論

小泉　保

1. 連句の成立

日本固有の韻文学の根底は和歌である。和歌は形式的に上の句（5・7・5）と下の句（7・7）に分けられるが、この上の句（長句）と下の句（短句）を別な人物が詠み合わせることにより、連歌形式が成立した。

連歌は、少数の詠者が長句と短句を交互に詠みつづけて 100 韻、50 韻もしくは歌仙（36 句）を連鎖状に形成したものである。

連歌は南北朝時代に隆盛を見せたが、江戸期に入ると歌仙式がよろこばれ、中期以降「俳諧」と称して庶民文学の地位を確保するに至った。俳聖芭蕉はこの俳諧の達人であった。今日言う「連句」とは「俳諧」のことを指し、正しくは「俳諧之連歌」という。俳諧とは滑稽を意味するため、「俳諧之連歌」とはすなわち滑稽を主意として詠まれる連歌ということになる。

俳諧と連歌との差は「俳言」（和歌、連歌に用いない漢語や俗語）の有無にあると言われている。連歌を含めて日本の古典の伝統をそのまま受けつぎ、ただ、その表現に漢語や俗語を取り入れて、連歌の面倒な方式をやや緩めたのが、貞門の俳諧である。貞門俳諧の祖は松永貞徳であるが、次に「貞徳翁十三回忌追善俳諧」（1665）100 韻における最初の３句のみ取り出しておこう。

野は雪にかるれどかれぬ紫苑哉　（蝉吟）

＜かる＝枯れる、紫苑＝師恩＞

鷹の餌ごひと音をばなき跡　（季吟）

＜なき＝鳴き＝無き＞

飼狗のごとく手馴し年を経て　（正好）

＜雪→鷹、鷹→狗という連想「物付」（ものづけ）が働いている＞

このように、俳諧は、連歌の余興として行なわれる、笑いを求める言葉遊びであった。

芭蕉は歌仙をとり入れ、貞門・談林俳諧のような１つの付けでなく、匂い、響き、移り、あるいは面影の要素を入れて付ける余情付けを以て、俳諧を真面目な芸術へと導いて行った。

ここに芭蕉俳諧の最高峰と見なされている『炭俵集』（1694）の中から「むめがかの巻」を例示しておこう。

（発句）　むめがゝにのっと日の出る山路かな　（芭蕉）
（脇句）　処々に雉の啼きたつ　（野坡）「前句」
（第三）　家普請を春のてすきにとり付て　（野坡）「附句」
（第四）　上のたよりにあがる米の値　（芭蕉）

この内、「発句」が独立して現代で言う「俳句」となり、「第三」が遊離して「川柳」になったと考えられる。というのは、川柳は「前句」と「附句」という関係から発生したものである。連句でいえば、脇句が前句で第三が附句に相当する。

芭蕉も前句付けをしきりに稽古したと言われている。

いのち嬉しき撰集のさた　（去来）「前句」（7・7）
さまざまに品かはりたる恋をして　（凡兆）「附句」（5・7・5）
浮世の果は皆小町なり　（芭蕉）　『猿蓑』

2. 川柳の発生

すでに、室町時代末期に山崎宗鑑（1589没）が刊行した『犬筑波集』には次のような前句附の例が示されている。

切りたくもあり、切りたくもなし　（前句）
（川柳 1）　ぬす人をとらへて見れば我子也　（附句 1）
（川柳 2）　さやかなる月をかくせる花の枝　（附句 2）

（附句 1）では「ぬす人を切る」という苛酷な成敗から、「ぬすまれたもの」が物ではなく人であると考えなければならない。すなわち、父親の愛妾もしくは若い後添いを息子に寝取られたと解釈される。姦通の現場を取り押さえられると、「二人重ねて四に斬る」となる。そこで、父親は苦渋の判断に迫られているのである。これに比べれば、（附句 2）は「月をかくせる花の枝」を切るか切らないでおくか迷う風流人の悩みにすぎない。

「前句附といふ事を世にもてあそび、樵の翁、草かる童まで、これをせずといふ事なし」（『俳諧高天鶯』元禄９年 1696）と報じているように、京・大阪を中心に前句附の流行が加熱していた。この風潮は江戸へも流れこんだ。

やがて、「前句」を提示して「附句」を懸賞募集するよになった。

江戸の俳諧師は前句付興行を「万句寄」と称し、その入選句をまとめて発表した。これは元禄の末頃から急速に流行するようになった。応募者は自分の作品に入花料（投句

料）をそえて近くの「取次」にとどけると、これらを集めて、点者が選定し、「勝句」を決定した上で、これを刷り物にして披露した。勝句の中でも優秀なものには賞品が与えられた。

さて、前句付点者の中でもっとも人気があったのが柄井川柳（1718～90）である。宝暦 12 年（1762）には、彼の寄句は１万を突破している。彼は「１句にて句意のわかり易き」独立性の強い附句だけを集めて前句を省いてしまった。つまり、「題にもたれし句作りは、さらりと柳に流せしより」附句が独立して「川柳」と呼ばれるようになったのである。

このように、前句附が単独文芸として発展していく過程で、前句と附句の対比関係に変化が生じ、初代川柳を経て、特異な単句形式が生み出されるようになった。つまり前句が単純化し、抽象化、観念化され、ついに削除されることになった。

かくて、川柳が存命中に勝句をつづった『誹風柳多留』は初篇（明和２年，1765）から、『柳多留』２３篇（寛政元年，1789）にまで及んでいる。川柳の死後も引きつがれ『誹風柳多留』１６７篇（天保９年，1838）をもって終わっている。

初代川柳の人気と川柳の隆盛は田沼時代の経済成長と文化奨励に依存するところ大であった。だが、田沼を陥れた松平定信の寛政の改革（1787～93）と水野忠邦の天保の改革（1841～3）は奢侈を禁じ、文芸を弾圧する改革であった。寛政３年には、好色本の第一人者山東京伝が手鎖５０日、版元の蔦屋重三郎が身上半減の処分を受けた。批判精神を身上とする川柳も衰退の道をたどった。次が川柳の辞世句である。

（川柳 3）　木枯や跡で芽を吹け川柳（初代川柳）

なお、選句形式は、高番、中番、末番の３部に分けられ、それぞれの番の勝句に順位をつけたものである。高番は（政治、経済、歴史）中番は（社会）末番は（艶種）の分野に類別されていて、末番がもっとも卑俗でセクシュアルなものであった。とくに、末番の勝句は『誹風末摘花』と題して初篇（1776）から４篇（1801）まで刊行されてきた。

3. 川柳の流れ

さて、「川柳」の称号は２代、３代と襲名されてきたが、５世川柳（1785～1858）は篤実徳行の人で生涯に３度も恩賞を受ている。天保１３年（1843）には次のような句を奉っている。

（川柳 4）　身にあまる風にひれ伏す川柳（５代川柳）

彼は社会批判や世相風刺を固く戒めたため、川柳は狂句のような言葉遊びに低落してしまった。

（狂句 1）　稲の穂が寝れば万民高まくら

「寝る」と「高枕」を縁語として結びつけているに過ぎない。

明治に入ると川柳もようやく息を吹き返してきた。

（川柳 5）　ゆうれいが無礼の者にしてやられ

明治 22 年 2 月 19 日、時の文相森有礼が暴漢に襲われて暗殺された。彼は日本の教育制度の根幹を確立した功労者であるが、日本語の文章語を英語にすべきだと主張する過激な思想の持ち主でもあった。それから 8 日後に無署名で新聞に掲載された川柳である。「有礼」が「無礼」にやられたという反語的用法と「ゆうれい」が「幽霊」に通じる工夫とがうまく働いている。

やがて、明治 37 年（1904）になると、阪井久良岐を中心に「川柳研究会」が結成され、狂句から脱皮した川柳の本領を求めて各種の結社が誕生している。

（川柳 6）　トタン葺き春雨を聞く屋根でなし（久良岐）

明治から大正にかけて、「新興川柳」の運動が勃興し、人生を凝視する生命派とイデオロギーに立脚する無産派の流れに分岐した。

（川柳 7）　生きようか死のうか生きよう春朧（雉子郎＝吉川英治）

（川柳 8）　汚れたる手で神様にとりすがり（奈良武）

昭和も戦争期になると、反戦の句が出現してきた。

（川柳 9）　手と足をもいだ丸太にしてかえし（喜多一二）

このため喜多一二は昭和 14 年に検挙され、収監中に病死している。

さて、次の句は前田雀郎（1897～1960）の作である。

（川柳 10）　音もなく花火のあがる他所の町

旅人としての孤独感を見事に表しているが、この川柳の「花火」は季語として働いていない。

（川柳 11）　腕組めばわが影法師も腕を組む（雀郎）

このように川柳を人生観照にまで高めようと精進に励む立場もある。しかし、昭和から平成に入り川柳人口は大幅に増え、いまや社会批判や人生風刺が幅を利かせている。

4. 連句の認知論的分析

「発句」を「俳句」と言い換えたのは正岡子規であるが、彼の主張する写生派的態度は外界を知覚的に描写することで、ここに俳句および連句を認知の方式で分析する可能性がでてくると思われる。

例えば、発句を認知論の立場から分析すれば、まず「前景」と「背景」に区分するこ

とができる。前景は知覚の焦点となるある出来事もしくはある状態である。背景はこれを取り巻く環境を意味する。前景を［　］、背景を（　）でくくることにしよう。

（発句）（（［日がのっと出た］梅の香に）山路で）

脇句は発句を背景とし、さらに脇句内に前景と背景の別をもっている。

（脇句）（（［雉が啼き立つ］処々に）発句）

第三にも脇句と同じような分析が当てはまる。

（第三）（（［家普請にとり付いた］春の手すきに）脇句）

こうした連句の意味分析をラネカーの認知方式によって公式化することもできるが、これについては別の機会に発表したいと考えている。

5. ジョークの語用論的分析

私はすでに『ジョークとレトリックの語用論』（1997）で、ジョークの「落ち」について語用論的分析を試みてきた。ジョークは人を笑わせるために意図的に落ちの仕組みを構えているが、川柳の方にも読者を苦笑へと誘いこむ要因が含まれているようである。すなわち、ジョークが明示的な笑いを求めているのに対し、川柳は潜在的な笑いをねらっていると言えよう。従って、ジョークにも川柳にも共通した笑いの構図が隠されているのではないかと思う。そこで、ジョークの落ちについて要点だけ説明しておこう。

（ジョーク 1）「睡眠薬」

医者が夫人を呼んで「ご主人は絶対安静が必要です。ここに睡眠薬があります。」と言った。

夫人が「いつ主人に飲ませたらいいのでしょうか。」と尋ねると、医者は「ご主人ではなく、あなたが飲むのです。」　（ラスキン 例 24 ii）

ジョークの落ちとは同じ条件において正常な上位項から異常な下位項へと急に移行させることである。

「条件」　／（妻）病気の夫に飲ませる　　（正常）「上位項」
睡眠薬　　↓
　　＼（医者）口うるさい妻に飲ませる　（異常）「下位項」

睡眠薬は病人に飲ませるものだという一般常識になっている予想を裏切って、付き添いの妻に飲ませるという異常な医者の要求に人々は笑うのである。

さて、こうしたジョークの「落ち」の構造を、どのように川柳の方へ適用することができるであろうか。

6. 川柳の語用論的分析

「正常」から「異常」へというジョークの落ちに対して、川柳では「異常」の方だけが提示されるのである。ただし、異常と言っても、人間の弱点や平凡な現実がテーマとされている。要するに、「ホンネ」と「タテマエ」という対立からすれば、川柳は常にホンネを附句の下位項として表現したものである。そして、ホンネの裏にタテマエの前句すなわち上位項がひそんでいると考えることができる。ここに、表現されたホンネの下位項から、これと対立するタテマエの上位項が推意されるとき、川柳から笑いが誘いだされると思う。理想と現実の落差に人々は納得してうなずくのである。

まず、川柳の前句の効用から考察することにしよう。次は『柳多留』6篇から選んだ句である。

首尾の能いこと　首尾の能いこと　　（前句）

（川柳 12）　あねさんと言いやと芸者子を育て　　（附句）

「人前では、私のことをおっかさんと呼んではいけないよ。姉さんと呼ぶんだよ。」と幼子に芸者がいい聞かせている。ここに落ちの構図を持ちこめば、次のように分析されるであろう。

「条件」　／（家の中）自分のことをおっかさんと呼ぶ

子育て

＼（人の前）自分のことをあねさんと呼ぶ

自分を若く見せ、親子の関係を他人に悟らせまいとする芸者の職業上の知恵はまことに「首尾の能こと」で、いまでもどこかで秘かに行なわれているようである。この川柳では、前句がうまく働いている。

次は『柳多留』初篇から取った有名な例である。

はなれ社すれ　はなれ社すれ　　（前句）

（川柳 13）　子が出来て川の字形りに寝る夫婦　（附句）

附句は平凡でほおえましい夫婦生活を描いているが、前句を通して次のような前提や推意を引き出すことができるのではないかと思われる

／（前提）子が出来る前は二人で寝ていた　（上位項）

寝るときの　　↑

スタイル　＼（現実）子が出来た後は三人で寝る　（下位項）

↓

（推意）夫婦は別々に寝ることになる

「はなれ社すれ」という前句があると、前提や推意を把握するのが容易になる。

だが、前句を削除して附句だけで独立させると、その意味も変化してくる。（川柳1）の「ぬす人をとらえてみれば我子也」も、「切る切らない」の深刻さがなくなり、放蕩息子に家財を持ち出されて嘆く親の心情に解されるようになった。

さて、附句が独り歩きをすると、推意をもって補ったり、注釈がないと分かりにくくなるものが出てくる。

運のよいこと、運のよいこと（前句）

（川柳 14）　役人の子はにぎにぎをよく覚え（附句）『柳多留』初篇

「にぎにぎ」とはワイロのことで、役人の収賄はいつの時代にも途絶えたことはない。

（川柳 15）　なましいを切羽つまって質におき

「（武士の）なましい」は刀のことであるが、「たましい」はまた「命」を連想させる。次の句には百科辞典的知識が必要である。

（川柳 16）　房下げてちょっと男が産んで見せ　『柳多留拾遺』１１篇

ちょっと読んでも何のことか分からない。昔は天井の梁から紐を下げ、産婦はこれをつかんで坐って出産したものである。亭主が「房下げて」具合をちょっと試している光景である。もちろん「男が産んで見せ」の語句で奇異の念を抱かせるのがねらいである。ただし、現代でもこの川柳まがいのことをする亭主族が増えてきたという。

さらに、同じような附句が異なる前句と組み合わさることもある。

障子に穴を明けるいたずら（前句）（元禄 5 年: 1692）

（川柳 17）　這えば立て立てば走れの親ごころ（附句）

子供の成長を楽しみ、そのいたずらを見逃そうとする親の態度が読みとれる。ところが、別な前句につけた似たような附句が拾い上げられている。

待ちかねにけり、待ちかねにけり（前句）（享保 19 年:1734）

（川柳 18）　這えばたて立てば歩めの親の馬鹿（附句）

子供は満１歳位で歩きだすもので、一人歩きは親が待ちかねる歓喜の瞬間である。

ところが、両方の附句が合体したものが出来上がった。

（川柳 19）　這えば立て立てば歩めの親ごころ　『柳多留』４５篇

現在ではこの句が一般的に格言のように用いられている。

次は前句はないがよく知られている川柳である。

（川柳 20）　泣き泣きもよい方をとるかたみわけ　『柳多留』１７篇

この句の対立内容は以下のようになろう。本来親の葬儀の後であるから、金銭問題は慎むべきであるが、現実にはタテマエよりもホンネが優先する。

／　無欲（正常、非金銭的）＜タテマエの上位項＞

形見分け　　↑

＼　強欲（異常、金銭的）＜ホンネの下位項＞

このように、川柳はホンネの下位項を長句形式で表現しているが、タテマエの上位項を推意するとき、その面白みが明確になる。

次の川柳は一種の語呂合わせで、ジョークと同じ枠組みでとらえることができる。

（川柳 21）　裸でと言はれて娘はをかしがり　　『柳多留』１０篇

「裸で」というのは嫁入り支度なしにという内意であるが、仲人が「先方では裸でもいいから来てもらいたそうで」と婿側の意向を伝えるのを聞いて、娘は裸体を連想してくすくす笑いだす情景を述べている。

／（仲人）嫁入り支度なしで　（裏の意味）

「裸で」

＼（娘）裸体で　　（表の意味）

では、ここで『誹風末摘花』４篇から一句を選んで分析しておこう。

（川柳 22）　とっさんは留守かか様がきなさいと

これは子供の使いによる口上で、江戸時代の不倫関係を題材にしているが、社会の裏面をのぞくことができる。ここでもホンネとタネマエがはっきり対立している。

／（世間の倫理）他の男を呼び入れてはならない（タテマエ）

亭主の留守

＼（女房の意向）浮気の相手を呼び入れたい（ホンネ）

江戸期には、不倫の結末は示談で済まされた。

（川柳 23）　御内儀と小判が寝たと覚し召せ

当時の詫び料の相場は「五両」であたが、この科料も田沼時代（1756～86）までで、その後インフレとなり、「七両二分」と５割アップした。「一両」は現在の１０万円位に相当する。

7. 川柳の構造

川柳中興の祖と見なされている阪井久良岐は川柳の真髄を次のように説いている。

「川柳は古川柳に統一されて後出発せざるべからず候。川柳の穿ち、可笑味、軽味は大必要に候。単に穿ちばかりいへば理屈説明に相成可候。」

すなわ、「うがち」「おかしみ」「かろみ」が川柳の３要素であるとしている。

「うがち」は広辞苑によると、「普通には知られていない裏の事情をあばくこと。人情

の機微など微妙な点を巧みに言い表わすこと。」と解説している。川柳が言う「うがち」は「裏面暴露」よりも「人情の機微」を表わす方に重心があると思う。吉岡龍城（1990, 67）は、「うがち味」は物ごとを正面から見ずに、横から、裏から覗き見る批判の眼を言う、と解説している。

（川柳 24）　役人の骨っぽいのは猪牙に乗せ　　『柳多留』２篇

固そうに見える役人は、吉原通いの猪牙（ちょき）舟に乗せて遊廓に送りこめば軟化するという社会悪をあばいた句であるが、現代でもこうした役人の接待方法が通用している。

そんの無いこと、そんの無いこと（前句）

（川柳 25）　御自分も拙者も逃げた人数也　　『川柳評宝十一松』

「五十歩百歩」という故事もあるが、相手も自分も結局は逃げ出した卑怯者であると人間の弱点を突いたものである。

尾藤三柳（1989[2], 121）は、川柳を発想面から次の３項目に分類している。

(a) リアリズム（写実と穿ち）

(b) ウイット（機知と意外性）

(c) リリシズム（抒情と内省）

リアリズムの項目に該当するのは次の川柳であろう。

（川柳 26）　鶏の何か言いたい足づかい　　『柳多留』初篇

鶏の足の動きを巧みにとらえた写生句である。尾藤は次の句も写生句としている。

（川柳 27）　本ぶりになった出ていく雨やどり　　『柳多留』初篇

だが、この句には次のような皮肉がこめられているように思える。

雨やどりでは、（小ぶりの内に出ればいいのに）本ぶりになってから（諦めて）出ていくものだ。筆者はもうすこし川柳の「おかしみ」と「皮肉」を追求してみようと思う。

8. 「おかしみ」と「皮肉」の構造

(1) おかしみ

「おかしみ」の分析は先に紹介しておいたが、上位項と下位項が明白なものをいくつか追加しておく。

（川柳 28）　寝ながらのお辞儀は頭を上げてする（政則）

／　頭を下げる（起きているとき：正常）

お辞儀　　↑

＼　頭を上げる（寝ているとき：異常）

（川柳 29）　異義なしと異義ありそうな声でいう（大本俊秀）

／ なし。（表面）

異義　　↑

＼ あり。（内心）

（川柳 30）　腕組みを解くと凡夫の顔になる（小松原爽介）

／ をすると（賢そうに見える）

腕組み　　↑

＼ を解くと（凡俗な顔）

下位項を提示して対立する上位項を推意させるのが川柳のおかしみの技法であると考えるが、前項と後項を対立させて両者の矛盾を示唆すると「皮肉」になる。

(2) 皮肉

初代川柳に協力して『柳多留』を編集、出版した呉陵軒可有（ごりょうけんあるべし）は「附句を問とし、前句を答とする、二句一章の問答が必要」としている。例えば、

いやらしいこと、いやらしいこと（前句）

（川柳 31）　女房と相談をして義理を欠き（附句）

「女房と相談して知り合いの不幸に香典を包むのをやめ不義理をした」のはという附句の問に対し、それは「いやらしいこと」だと前句が答えていることになる。

／（問）女房と相談をして義理を欠き（附句）　『柳多留』初篇

問答

＼（答）いやらしいことである（前句）

問答形式をとると、附句の出来事について前句がある評価を下しているので、文意もいっそう明確になってくる。上の附句に代入できる現代の川柳を紹介しておこう。

（川柳 32）　保険屋と夫の値打ち協議する（岩元浅雄）

／（問）保険屋と夫の値打ち協議する（附句）

問答

＼（答）（いやらしこと、いやらしいこと）（前句）

「夫の値打ち」とは生命保険の補償額査定のことで、「命の値踏み」に相当するから「いやらしいこと」だと思う。

やがて附句が前句を削除して独立すると、「一句の中に問答が必要になる」と呉陵軒は述べている。そこで、

（川柳 33）孝行に売られ不幸に買わるる身

という句を添削して、次のように改めている。なお、問を「前項」、答を「後項」と呼

ぶことにする。

（川柳 34）　孝行に売られ不幸に受けだされ（古川柳）

（前項）親孝行のために身を売ったのに、（後項）親不幸な遊び人の男がその女を受け出してやるという社会の矛盾を示唆し、孝行と不幸を対立させている。

／（前項）（女は）孝行で身を売られたのに、

問答

＼（後項）　親不幸な男がその身受けをする

（川柳 35）　開運の印鑑を押す借用証（江藤一得）

（前項）開運の印鑑（ならば金運に恵まれるはずなのに）借金に追われている。

（川柳 36）　無理をせず休めと医者は無理を云う（井ノ口牛歩）

／（前項）するな。休め。（医者）

無理

＼（後項）しなければならない。休めない。（生活の実状）

「無理をするな」という忠告が「無理な」なのである。

（川柳 37）　大男総身に知恵が回りかね（古川柳）

大男とは幕府のことで、財政が窮迫し、その権威も失墜した末期症状を皮肉った川柳である。前項の「図体は大きい」けれど、後項の「知恵は少ない」を対比させて政治批判を行なっている。幕府は激怒してやっきになって作者を探したが見つからず、口伝えに広められた皮肉の句である。

しかし、前項と後項が「Ａだけれども Ｂ］という逆接の形で連結すれば皮肉であるが、「ＡだからＢ」という順接の形をなせば原因結果の関係に立つ。

（川柳 38）　抱いた子にたたかせてみる惚れた人　『柳多留』初篇

子といっても、自分の子供ではない。隣の子か幼い甥か姪であろう。田辺聖子（1981, 20）は次のように巧みに解説している。

子供を抱いているから、近所の人に見とがめられることもない。男も子供をあやすそぶりをして、美しい娘に、いろいろしゃべってみる。娘はもう赤くなって、

「知らないね、金坊。憎らしいお兄ちゃん、そんなこというんならぶつよって、ぶっておやり」

もみじのような子供の手を添えて、男の体を打つ。

羞恥心とうれしさで上気した美しい娘の、さくら色の頬が目にみえるような、品ののいい色けの句である。

この句の前項は娘の行為であり、後項は目標となる相手の男である。ここに惚れた人

だから抱いた子にたたかせるという因果関係を汲み取ることができよう。

最後に最近見かけたおかしみの川柳を二つほど加えて分析しておこう。

（川柳 39）　なお変になってでてくる美容院

／（理想的意向）　きれいになるはず　（タテマエ）

美容院　　↑

＼（現実的結果）　行く前よりも変な姿になっている　（ホンネ）

↓

髪型や化粧が似合っていない

最下位の項は下位項から推意で引き出された理由を示している。

これで川柳の本質が解明されたわけではない。こうした分析を通して川柳の諧謔性が明確になってくると思う。俳句は俳諧からタテマエの道を開拓して純文学へと志向してきたが、川柳はホンネを告白することによって、俳諧の特質であった滑稽の精神をいまなお保持し、大衆の共感を呼んでいる。

また、川柳には時代を敏感に反映しているものが多い。

（川柳 40）　賞味期限きれた女房と生きてます

この句には理想と現実との食違いがよく出ている。

／　内にあって楽しい夫婦生活を送りたい　（理想）

女房の賞味期限　　↑

＼　が切れて味気ない生活をがまんしている　（現実）

↓

夫婦も互いに年をとってしまった

ここでは「賞味期限」という最近流行の用語がうまく使用されている。こうした特性から、川柳により時代思考の変遷を追うこともできるし、「川の字形りに寝る夫婦」のように不易の平凡性を賞味することもできる。

以上紹介した川柳の語用論的分析方法はひとつの試みに過ぎない。別な角度からの接近ももちろん可能である。だが、語用論によって、文学的鑑賞や文芸批評に客観的手順を示唆することができればと願っている。

参考文献

尾藤三柳.　1989[1].　『川柳入門－歴史と鑑賞』雄山閣出版

尾藤三柳.　1989[2].　『川柳小百科』雄山閣出版

東　明雄.　1978.　『連句入門』中央公論社

小泉　保.　1990.　『言外の言語学　日本語語用論』三省堂

小泉　保.　1997.　『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店

Langacker, R. W.　1987.　*Foundations of Cognitive Grammar vol. 1: Theoretical Prerequisites.*　Stanford, Stanford University Press.

Levinson, S. C.　1983.　*Pragmatics.* Cambridge, Cambridge University Press.

岡田　甫.　1967.　『川柳末摘花詳釈　全』有光堂書房

Raskin, V.　1985.　*Semantic mechanism of humor.* Dordrecht, D. Reidel

下川　弘.　1994.　『江戸古川柳の世界』講談社

田辺聖子.　1981.　『古川柳おちぼひろい』講談社

山沢英雄.　1995.　『誹風柳多留（1, 2, 3）』岩波書店

山路閑古.　1993.　『古川柳』岩波書店

吉岡龍城.　1990.　『川柳みちしるべ』本阿弥書店